



高雄コンベンションセンターに隣接するホライズンシティマリーナでは、海上展示がなされた。ラグジュアリーな大型艇が並び、ボートショーらしい雰囲気が醸し出されている



海上出展艇のなかには、有料のショートクルージングや、VIP向けの試乗を行っているところも多かった。海から見た高雄の街並みは、乗船ゲストたちの目に、どんなふう映ったのだろうか

が登録されているが、現在の状況では、なかなか新規に置き場を探すことが難しいらしい。

しかし、台湾には240ほどの漁港があり、これらをマリーナとして利用する方策が各所で進められている。会員制のマリクラブやヨットクラブのブースもいくつかあったが、個人で艇を所有するのではなく、複数の艇をクラブが所有し、会費を納入した会員が利用するという形での展開も増えていきそうだ。

さて、ボートショー期間中の特に後半2日間は、土日と重なったこともあって、会場は来場者であふれ返っていた。展示艇のブースの周りを取り囲むように、何十メートルも順番を待つ人の列が連なる様子は、日本のボートショーではまず見たことがない。ボートショーそのものが、万博のような感じでレジャーになっているようでもあるが、これだけの活気があることは見逃せない。展示艇には、商談が決まった数が示されているところも多く、海外に向けて発信するだけでなく、内需も活発になっていると感じさせるボートショーであった。日本国内のユーザーだけでなく、関連業者にとってもマーケットとして検討に値するだけに、一度は足を運んでみることをおすすめしたい。

CLOSE-UP

## 日本人デザイナー発 生まれ変わった28フッター

今回のボートショーには、日本のウチヤマデザイン(代表:内山義啓氏)が、現地のライズマリン社と協力し、注目のボート「N-280」を出展した。内山氏は、大型のプレジャーボートの船内設計を中心としたトータルデザインを手がけているが、なぜ、このサイズのフィッシングボートを? さっそく話を聞いてみた。

「日本のあるプロダクションボートビルダーの古いモデルのモールド(型)を、同社のボート建造事業撤退の際に譲り受けたんです。これまでに台湾では何度か仕事をしてきたこともあって、モールドを台湾に持って行って造ることに決めました。モールドは壊せませんから、船体やデッキはそのままで、インテリアのデザインを大幅に変更。2000年にデビューしたボートに現代風の味付けを施すだけで、ずいぶん雰囲気が変わり、今風のボートに仕上がったんじゃないかと思います」

内装は、ステアリングやシート周りを、スタイリッシュなデザインに変更。FRPがむき出しだった壁には内装材を張ったり、ソファの材質を変えたりすることで、大幅に高級感が増した。一言でいえば、あか抜けたという印象だ。

「エンジンは225馬力、試走時には40ktのスピードが出ました。台湾には、地元の人たちが楽しむためのエントリーボートがないということを痛感していたので、このボートはぴったりだと思います」

聞けば、「日本のボート」というだけで、台湾では一種のブランドになるともいう。それでも、その素性を明かすことができない条件のなかで、あえて挑戦する姿勢はまさに待! 期間中には7~8隻の引き合いがあったというが、次なる野望にも注目したい。



上: 外装カラーと内装の仕様、エンジンのサイズを変えた2艇のN-280を出展  
下左: メガヨットのインテリアデザインも手がける内山氏だけに、そのセンスが光る  
下右: ウチヤマデザイン代表、内山義啓(よしひろ)氏 (<http://www.uchiyama-design.com/>)